

# 日本疫学会 ニュースレター

平成20年4月15日発行 No.31

## 疫学研究と統計法改正

日本医学会副会長、東北大学名誉教授  
久道 茂



### はじめに

昭和22年に制定されたわが国の統計法が全面的に改正し平成19年5月に公布された。既に本学会員は承知のことである。この改正に関連して、日本医学会の分科会である社会医学関連の研究者達から、ある懸念の声が上がっていた。それは、改正統計法第33条1項2号に記載されている「総務省令で定めるものを行う者」として、もし社会医学研究に従事するものを規定されないと、われわれが行ってきた疫学研究が実施できなくなる可能性があるという心配である。これまで、法的には目的外使用という枠の中であったものの、しかるべき手続きで、ある程度の忍耐力を持てば、人口動態統計などの政府諸統計を利用することはできたのである。しかし、改正法の文言の解釈や上述の「行う者」に規定されない場合、疫学研究が不可能になるかもしれない、と考えるのも自然なことである。その結果、本学会員は学会ホームページ、本ニュースレターで既知のことと思われるが、日本疫学会理事長を初めとして関連する社会医学系学会理事長らの連名で、総務大臣、厚生労働大臣宛への要望書を平成19年7月に提出した。その後、日本医学会でもほぼ同様の要望書を高久医学会長名で両大臣宛の要望書を提出した。

著者は、日本医学会社会医学系副会長の立場で今回の要望書提出にいたる仕事にいささか関わったという事もある。学会事務局から統計法改正にかかる問題の原稿執筆依頼を受け、ほぼ脱稿しようとしていた矢先に、日本学術会議誌「学術の動向」が拙宅に送られてきた。著者は、かつて日本学術会議の17、18期会員であったこと、現在は連携会員になっている関係で自動的に送られてきたものだが、その特集1「保健医療と個人情報保護法」を見て驚いた。著者が書こうとしていたほとんどのことが、岸玲子先生の「疫学研究における個人情報保護と関連政府統計データ利活用の課題」をはじめとして、實成文彦先生らの「公衆衛生現場における行政情報の活用と個人情報保

護」、福田吉治先生の「公衆衛生分野における政府統計の利活用と個人情報保護」、大島明先生の「地域がん登録事業から見た疫学・統計データの活用と個人情報保護」に既に述べられているのである。本誌で改めて重複するようなことを書くまでもなく、「学術の動向(2007年12号)」を是非読んでいただきたいと紹介すれば事足りるのではなからうか。とはいうものの、事務局に約束したという思いから、上述の諸先生方の論文と重複することを承知の上で表題に関する著者の考えを以下に述べることにする。

### CONTENTS

疫学研究と統計法改正 .....久道 茂 1	国際疫学会西太平洋地域学術総会に参加して.....若林 チヒロ11
基礎研究からの疫学研究・栄養教育へ 響場 直美 2	学会案内
出会いによる転機で疫学の道へ 畑山 英明 3	第19回日本疫学会学術総会の予定... 12
日本疫学会奨励賞を受賞して 食と健康に関するエビデンスを求めて 若井 建志 4	第18回国際疫学会のご案内..... 12
記念品が新調されました...西 信雄 5	第11回運動疫学研究会 学術集会開催のご案内..... 12
疫学に思うこと .....廣畑 富雄 6	第9回運動疫学セミナー 開催のご案内..... 12
JEA(日本疫学会)会員各位へ 青木 國雄、重松 逸造 7	委員会からのお知らせ
書評.....中村 好一 8	将来構想検討委員会での検討により 4つの臨時委員会が発足しました... 13
学会報告	Journal of Epidemiology 編集委員会からのお知らせ..... 13
第18回日本疫学会学術総会を終えて 山路 義生 9	第18回国際疫学会の旅費補助対象者 が決定しました.....中村 好一14
第13回疫学の未来を語る若手の 集いの報告.....村上 義孝10	事務局だより..... 14
	編集後記..... 14

## 社会医学系学会の動きと 日本医学会の対応

日本医学会の主要事業である日本疫学会総会が第27回目を迎えて平成19年4月、岸本忠三先生を会頭に大阪で開催された。関連する医学会分科会総会も行われ、従来から行われていた社会医学系学会理事長懇談会を拡大する形で、日本衛生学会森本兼義理事長による世話で、日本産業衛生学会清水英佑理事長、日本公衆衛生学会實成文彦理事長、日本疫学会児玉和紀理事長、それに加えて日本学術会議から会員の岸玲子先生、日本医学会から副会長の著者らが参加して懇談会が行われた。そのときには、社会医学系学会の今後のあり方について、関連学会の連携、統合、社会への発信、医療改革に伴う法改正と学会のかかわりなど、フリートークの形で話し合いが行われた。

当時、日本医学会の中では臨床系分科会理事長らの発案で、医学会に臨床部会、基礎部会、社会部会の3部会を作り、現在社会的に話題となっている諸問題、例えば、異常死、医療崩壊、専門医制度などに関して医学的専門家集団としての立場を明確にし、もう少し社会への提言を行うための議論をす

べきではないか、という動きがあった。そのため、日本医学会社会部会においても今後集まりをもって議論することになるだろう、と著者は発言した。その後、7月26日同懇談会が東京で開催され、4学会理事長連名で、また、日本医学会からも関係大臣宛の要望書を提出することが決められた。

そのような経緯で、平成19年11月9日、日本医学会高久会長と著者は「統計法の改正に係わる要望書」を持参し厚生労働省統計情報部長および総務省統計局政策統括官に面会し、それぞれの大臣宛の要望書を提出した。総務省ではかなりの時間をとっていただき統計法改正にかかわる問題点についての懇談を行い、日本医学会が懸念している点について十分理解していただいたと確信している。

### 疫学を益学に

疫学は、人間集団を対象にした研究である。しかも、動物実験のような一定基準に設定した状況での実験は不可能である。生きた人間、普通に生活している人々の長期観察によって研究が成り立つ。新薬の治験、ワクチンの効果評価のような介入試験（臨床疫学研究）はむしろ少なく、疾病予防に係る

危険因子の同定には、適切な数の人間対象集団とバイアスの少ない研究方法、そして何よりもエンドポイントとなる疾病罹患や死亡情報が正確に入手されなければならない。そのため、政府統計の個人データ（マイクロデータ）が行政目的で行うクロス集計だけでなく、疫学研究者に提供可能となり種々の多変量解析ができれば、研究の発展は飛躍的に広がるであろうし、また公衆衛生政策に多くの利益をもたらすに違いない。それだからこそ、今回の統計法改正に関する本学会の対応は極めて重要なことである。著者は、第14回日本疫学会学術総会（於山形市）の特別講演「疫学 - その科学性と倫理性 - 」で、人を対象とした研究（疫学研究）は、「科学性を高めようとすると倫理性を低くすることが多い、倫理性を高めれば科学性を損なう傾向が出てくる。しかし、（新薬、ワクチンなどの研究で）科学性の低い研究結果を人々に応用するのは倫理的でない」と述べた。「疫学は易学か」と悪口を言わないように、「疫学を本当の益学」にするために、今回の法改正に注意深く関心を寄せ発言する義務が、本学会にはあると思う。（以上）

### プロフィール

現在、宮城県対がん協会長、厚生科学審議会会長などを兼務。東北大学退官後、疫学研究は中止し、専ら自治体病院の運営・経営問題にかかわる。近著に「病院経営こ

とはじめ（医学書院）」、「医学・医療の品格（薬事日報）」があり、このテーマでの講演が続く。茂堂久（もどうひさし）のペンネームで小説「シャングリラ」「アンデスの神々」なども著す。

## 基礎研究からの 疫学研究・栄養教育へ

独立行政法人国立健康・栄養研究所  
栄養教育プログラムリーダー 饗場 直美

これまでの私の25年間の研究生活は、生化学・免疫学を中心とした基礎研究で、分子レベルでの免疫反応のメカニズムの解明や新たな分子発見および精製に費やされていました。特に、試験管内、細胞内、動物を対象とした

試験によって細胞内でのメカニズムや、分子間での相互作用、生体内での機能について明らかにしようとしていたものでした。

中でも私がアメリカの大学の研究所に滞在していた1990年代は、抗原提示



のメカニズムの解明がまさに日進月歩の勢いで進んでいました。MHC-Iの

X線解析によって、その立体構造が明らかになり、その構造からMHC-Iに結合可能な抗原ペプチドの長さが規定されること、そしてMHC-Iの遺伝子多型と抗原ペプチドのバリエーションの発見、抗原発現に至るトランスポーターの遺伝子多型の発見や、抗原提示に関するプロテアーゼのサブユニットの遺伝子多型が報告され、これまで明らかにされていなかったMHC-I、IIへの抗原提示過程や自己と非自己を認識する免疫の基本的仕組みが怒濤のように研究成果として発表されてきました。免疫の分野で、自己免疫疾患やMHCのハプロタイプの関連性についてこれまで疫学的データが報告されていましたが、そのメカニズムや分子機構に踏み込んだ研究は少なく、疫学調査結果と基礎的研究についてのつながりは私の中ではあまりありませんでした。大学院の時代、「臨床研究は漁師で、基礎研究は農耕」のようなものと聞かされてきました。臨床の現場で見つかったさまざまな疾患の原因を、基礎的研究を実施して明らかにすることが、臨床と基礎とをつなげる

橋だと感じていましたが、それも簡単な事ではないと思います。

実際的に、疫学調査と基礎的研究をつないだ研究発表として、私の中で認識された論文は1995年にNatureに発表されたRobert Gallo博士の論文でした。それは、カボシ肉腫が女性よりも男性により多く発症するという疫学調査結果の根拠としてhCG (human chorionic gonadotropin: ヒト絨毛性ゴナドトロピン) がカボシ肉腫を抑制するということをin vitroの系である細胞レベルで明らかにした論文でした。これまで、免疫学のなかで主に細胞内での分子メカニズムをin vitroで研究してきた私にとって、実際に臨床疫学データに論を發して、その根拠となる具体的な分子機構を証明した論文、また、その論文がGallo博士の研究室から発表されたことが非常に印象的でした。そして、疫学調査と基礎研究がこのようにつなげられるというひとつの方向性を示してくれていました。試験管、細胞レベル、マウスレベル、そして最終的にヒトではどうかと言う思考の流れが定着していた私にと

って、まったく逆のアプローチからの証明は非常に新鮮でした。最近では、疫学的な結果に対して、遺伝子解析やモデルマウス作成等を通してその原因について明らかにされ、疫学結果と基礎研究がつながった成果として多くの論文が発表されるようになりました。

私は、数年前から免疫研究から栄養教育へと大きく方向転換し、ヒトを対象とした試験に携わるようになりました。科学的な論理展開ということは、これまでに私が携わってきた基礎研究となんら変わらないと考えていますが、統計学的手法についてはこれから研鑽が必要だと考えています。また、私が携わっている栄養教育において、基礎的研究にまでつなげるような研究はどこまで可能かわかりませんが、基礎研究も疫学研究も、真理を追究することが目的であり、プロチャスカ博士がヒトの行動変容においてステージ理論を見出したようにはいかにいまでも、真理を見つけ出す努力をしていきたいと考えています。

### プロフィール

ノートルダム清心女子大学、徳島大学大学院・医科学研究科・博士課程を修了後、国立公衆衛生院、MIT (ポストドク) を経て現在に至る。基礎研究から栄養教育・食育に研究テーマを移し、公私共に食育を実践して

います。人との付き合いが苦手で基礎研究に進んだつもりだったのですが、人の話を聴くのが楽しいと感じるようになってきたのは、とても外交的である母親の遺伝子がこの年でおきてきたのかもかもしれません。

## 出会いによる転機で 疫学の道へ

大阪市立大学大学院医学研究科公衆衛生学講座大学院生  
畑山 英明

### 疫学との出会い

この度、このような紹介の機会をいただき、とても光栄に思います。文章が苦手ですので、お引き受けしようにか迷いもしました。しかし、これも何かのご縁だと思い、お引き受けさせていただきますことにしました。

学生時、公衆衛生学において疫学を使用するということは知っていましたが、恥ずかしながらあまり疫学について理解していませんでした。ただ、歯学部入学時より公衆衛生学に対して、漠然と興味をいだいていました。そういうこともあり、疫学と出会う運命にあったのだと、今では思います。最初



の転機は、学部5年生時にありました。公衆衛生学の非常勤講師をされていた多摩立川保健所の矢澤正人先生との出会いになります。授業で矢澤先生は、

保健所での仕事について熱心に説明してくださいました。地域における集団の特性調査、疾患分布の調査、およびそれを踏まえた上で作成した保健政策などです。当時は、これらのことに疫学が深く関わっていることに気付くことができませんでした。しかし、集団を対象とする保健所での仕事に大いに興味がわき、自分も集団の健康増進に寄与する仕事ができればと思いました。当時から大学院に進学し、研究を志望していましたが、どの分野に進むかということまでは決めかねていました。しかし矢澤先生の授業を受けて、大学院では公衆衛生学に進学することを決めたことを記憶しております。大学・研修病院は東京でしたが、大学院は地元で進学することを決めていたことと、インフルエンザをはじめとする感染症の研究内容に興味を惹かれ、大阪市立大学大学院医学研究科公衆衛生学に入局致しました。

私と疫学との出会いの始まりは、本教室の教授である廣田良夫先生との出会いになります。廣田先生と出会えたことは、自分の人生において非常に大きな転機となりました。公衆衛生学分野において、疫学が果たす役割、その

重要性をご教授いただきました。疫学を用いることで、前述した集団における健康増進に寄与することができるからです。廣田先生をはじめ教室員の先生方は、疫学に対して非常に熱い思いを持たれており、指導を受けるごとに自分の中でも、疫学に対する思いは強くなってきました。疫学のおもしろさをご教授いただいたことに、非常に感謝しております。そして、疫学という分野についてより広く学び、疫学の発展に寄与できればと思い、今年度（2007年度）学会に入会致しました。

### 今やっていること

現在、行っている研究は大きく分けて2つあります。どちらも、感染症に関する分野です。1つは、インフルエンザワクチンの有効性の研究です。当教室では、小児におけるインフルエンザワクチンの有効性に関する疫学調査のデータが蓄積されておりますので、現在、そのデータを解析しております。また、最終的な解析は終了していませんが、厚生労働科学研究費補助金による研究班の班会議にて発表の機会を頂いております。

2つ目の研究は、WHO西太平洋地

域各国における手足口病流行状況調査になります。この研究は、WHO西太平洋地域事務局からの依頼になります。手足口病は、幼児を中心に流行する急性ウイルス性感染症です。手足口病は基本的に軽症の疾患ですが、中枢神経合併症などの重症合併症を伴うことも稀にあります。手足口病の流行中に、手足口病の経過中に急死した小児がマレーシア、台湾、およびわが国で見られています。稀ながら死亡例が確認できる感染症であるにもかかわらず、西太平洋地域各国における手足口病のサーベイランスシステムの実態は不明瞭な状況です。調査を行い、各国における流行状況、疾患負荷の比較を行うことにより、今後のサーベイランスシステムの改善に関する提案を行うことを目標とします。現在は、まだ調査をはじめたばかりの段階です。

これからやりたいと思っていること

現在、感染症に関する疫学を研究していますが、他にも出身分野である歯科を含め様々な分野においての疫学を勉強していきたいと思っております。今後とも、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

### プロフィール

東京医科歯科大学歯学部卒、東京大学医学部附属病院での歯科臨床研修を経て、大阪市立大学大学院医学研究科公衆衛生学教室に大学院生として入局。

趣味：旅行、ドライブ、お風呂（温泉）

学部生時代には、お風呂めぐりに毎週のように行っていました。

今も、週末は機会があれば温泉めぐりをしています。

## 日本疫学会奨励賞を受賞して

先日の第18回日本疫学会学術総会において、下記の通り、平成19年度日本疫学会奨励賞の贈呈が行われました（敬称略、順不同）。奨励賞を受賞された若井建志先生と西信雄先生に、受賞の喜びや今後の抱負について寄稿いただきました。

奨励賞：若井 建志「がんおよび慢性疾患の栄養疫学的研究」

西 信雄「多重レベルモデルを用いた脳卒中死亡率の地域格差に関する研究」

## 食と健康に関するエビデンスを求めて

名古屋大学大学院医学系研究科 予防医学 / 医学推計・判断学  
若井 建志

このたび、日本疫学会奨励賞という大変名誉ある賞をいただくことにな

り、学会理事長 児玉和紀先生、学術総会長 丸井英二先生ならびに関係諸

先生方に深謝申し上げます。

私が栄養疫学的研究に関わるきっかけとなったのは、大野良之先生（名古屋大学名誉教授）から食事要因と膀胱がんとの関連を症例対照研究で検討するというテーマをいただき、食品群・栄養素摂取量推定のための食物摂取頻度調査票を共同研究者とともに開発したことです。その後、この調査票を用いて、膀胱がんのみならずIgA腎症、花粉症、骨密度、炎症性腸疾患と食品や栄養素摂取との関連を研究してきました。また、これらの研究での経験を生かし、文部科学省の助成による大規

模コホート研究 (JACC Study) や愛知県がんセンターにおける病院疫学研究 (HERPACC) など、既存研究の食物摂取頻度調査にもとづく食品・栄養素摂取とがんリスクとの関連を検討する機会もいただきました。さらに現在、日本歯科医師会会員を対象としたコホート研究 (LEMONADE Study) においても、私どもが開発した食物摂取頻度調査票を使用し、歯と全身の健康、栄養との関係の解明をめざしております。

メディアには食と健康に関する情報があふれているものの、根拠となる疫学研究は十分ではないのが現状と思われます。現在、私は厚生労働科学研究班で、日本人における生活習慣と肺がんとの関連に関する疫学研究論文のレビューに携わっておりますが、野菜・果物摂取と肺がんリスクとの関連といった、比較的一般的と考えていたテーマですら、日本人に限ればデータが十分ではないことに驚いております。

もちろん、食と健康に関する疫学研究という大きなテーマで私ができることはごく限られておりますが、今後とも微力ながら栄養疫学研究を継続し、

エビデンス蓄積のほんの一部にでも貢献することができればと考えておりますので、今後とも日本疫学会の先生方のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、これまでの研究でご指導いただきました、大野良之先生、川村孝先生 (京都大学教授、元・名古屋大学助教授)、田島和雄先

生 (愛知県がんセンター研究所長、前・同疫学部長)、浜島信之先生 (名古屋大学教授) ならびに、多くの共同研究者の先生方、研究にご参加、ご協力をいただきました方々に深謝申し上げます。また疫学会総会その他の場で、私どもの研究に有益なご助言、ご批判をいただきました疫学会会員の先生方にもお礼を申し上げたいと存じます。



若井建志先生 (左) と西信雄先生 (右)

## 記念品が新調されました

放射線影響研究所疫学部副部長 西 信雄

この度は、栄えある日本疫学会奨励賞を受賞させていただき誠に光栄に存じます。また今回の第18回の学術総会では、はじめて事務局長として評議員会や会務総会に臨みまして、とても思い出深い学会になりました。学会長の丸井英二先生には、大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

受賞の対象となった研究は、NIPPON DATA80に多重レベルモデルを適用して脳卒中死亡率について分析したものです。社会疫学という立場で研究を進めたいと考えてきた私にとって、階層構造 (全国から無作為抽出された300調査区における満30歳以上の住民を対象としています) を有するNIPPON DATAを使って地域レベルである市町村の人口規模別に脳卒中死

亡率の差を明らかにしたことで、ようやく奨励賞に値する結果が出せたように思いました。

ただ、奨励賞選考委員長である深尾彰先生からは、「苦渋の選択であった」というお言葉を後から聞かされました。もちろん何名のご推薦があったというようなことも明らかにはできませんが、推薦の受け付け、選考の依頼、結果の通知と、私自身が選考対象であると同時に、事務局長として常に経過を知る立場にあったため、とても複雑な気持ちでした。もっと若い時期に受賞しておくべきだったと後悔することしきりでした。

さて、学術総会抄録に記載しました略歴をご覧くださいとおわかりのように、現在勤めている放射線影響研究所



が私にとって6つ目の職場です。宝塚市立健康センターや宝塚市立介護老人保健施設に勤めていたときも研究は続けておりましたので、自分でもそれほど回り道をしたとは思っていませんが、老人保健施設の施設長を務めて奨励賞をいただいた会員は後にも先にも私だけになるのでは? と思っています。

実は、昨年事務局長が放射線影響研究所 (広島) に移転したのを機に記念品を新しくしましたので、私自身が

新しい記念品の受賞者第1号となりました。自分で選んでいて言うのも何ですが、アクリル製の盾でとても洗練されたデザインのものでした。まだ受賞されていない会員の方々も、是非この記念品を目指していただきたいと思えます。

最後に、NIPPON DATA80を分析する機会を与えてくださいました上島弘嗣先生（滋賀医科大学福祉保健医学講座教授）、岡山 明先生（財団法人結核予防会常任理事）、児玉和紀先生（財団法人放射線影響研究所主席研究員）をはじめ関係者の皆様に厚くお礼

申し上げます。さらに、私と同じくニュースレターの編集委員である延原弘章先生には、本号に掲載する写真を撮っていただき、誠にありがとうございました。

## 疫学に思うこと

九州大学名誉教授 日本疫学会 元理事長  
廣畑 富雄

### はじめに

私が日本疫学会のお世話をしたのは、随分前のことになった。手元の資料を見ると、第1回日本疫学会理事会を、1992年6月に開いている。この原稿を書いている2007年から、丁度15年前のことになる。当時私は理事長をさせて頂いていたが、特に何を望んでいたのか、などを含め、今回ニュースレターに紙面を頂き、“疫学に思うこと”と題して書いてみたい。またマクメイン教授の訃報に接し、その追悼文を、また我々がこの11月に発表した、がん予防の報告書と勧告も簡単にご紹介したい。

### 1. マクメイン教授 (Prof. Brian MacMahon) の追悼

最初に、世界の疫学会の雄であった、マクメイン教授の追悼を述べたい。昨年の12月の初め、先生の末娘、Maryさんからのメールが届いた。「悲しいお知らせがある、父が脳出血で倒れ、亡くなった」という知らせであった（享年84歳）。かねてこういう日が来はしないかとおそれていたが、大きなショックを受けた。まさに巨星落つという感じであった。ハーバード大学公衆衛生学部（Harvard School of Public Health, HSPH）の疫学教室を、31年間の長きにわたって、Chairman（主任教授）として主宰され、多くの高名な疫学者を育てられた。日本疫学会会員の多くの方は、少なくともお名前は

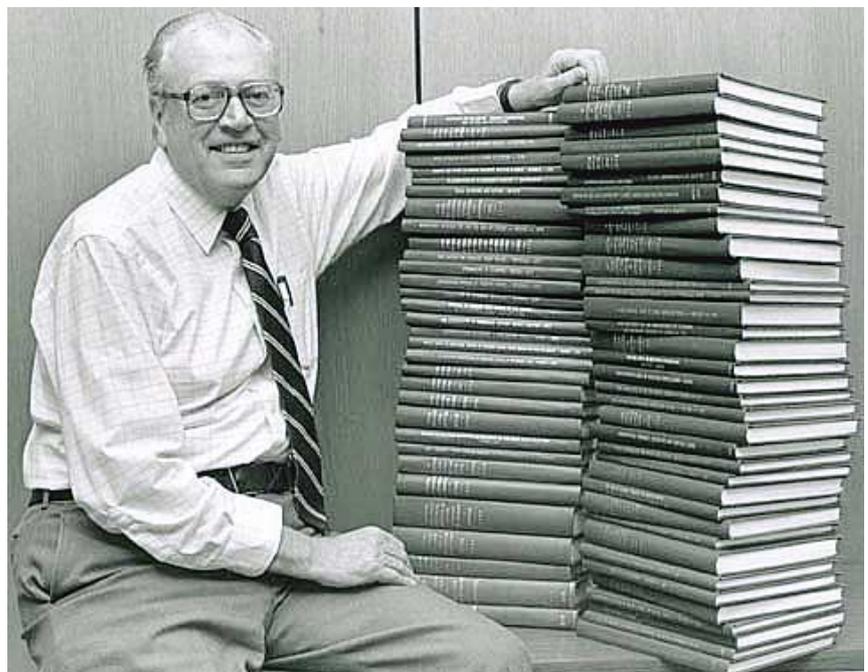
ご存じだと思う。私は1964年から68年にかけて、Master ついでDoctor courseでお世話になった。

最近の同教授は、関節リウマチのため、残念ながら体がご不自由であり、ボストン郊外の自宅からほとんど外には出られなかった。しかし知的には非常にシャープであり、昨年6月にお会いした時も、疫学にける情熱は、以前と変わりはなかった。疫学の有名なテキストブック、Epidemiology, Principles & Methodsの改訂さえ考えておられた。4人のお子さんがあり、末娘のMaryさんが本当に良くお世話をされた。その6月に私は、HSPHからAlumni Award of Meritと言う賞を

頂き、その授賞式のため家内共々ボストンを訪ね、マクメイン教授と一日一緒にできた。最晩年にお目にかかれたのを感謝している。

マクメイン教授を一言で言えば、偉大な疫学者であり、偉大な研究者であり、また偉大な教育者であった。同時に、非常に心が温かい方であった。ユーモアがあり、また学問にも日常生活にも高いモラルを持っておられた。私はたびたびご自宅、またsummer house（山荘）に招かれ、泊めて頂き（山荘の敷地内に川が流れ、ビーバーがダムを造る）、また福岡の我が家の陋屋にも泊まれたことを思い出す。

マクメイン教授は、英国ご出身で、1940年代に、Birmingham 大学医学部を卒業し、1952年に、同大学からPhDも得られた。その翌年に渡米しHSPHでマスターコースを取り、やがて1958年に、HSPHの疫学教室の主任教授に迎えられ、1989年に退官するまで31年



故 マクメイン教授、多くの指導した学位論文と共に

間、その職にあった。疫学のテキストブック、Dr Pughとの共著、Epidemiology: Principles & Methodsは有名で、この本を私を含め3人で日本語に訳した(疫学、原理と方法、丸善)。当時世界的に、また日本で、もっとも広く読まれた疫学のテキストブックであった。現在の同名の改訂版は、後任のDr Trichopoulosとの共著である。

多くの研究について述べる紙数はないが、乳癌の国際共同研究、X線診断による放射線ばくると小児白血病の研究、先天性の幽門狭窄の研究等々の優れた研究がある。乳癌の研究では、乳癌のリスクが、最初の満期出産の年齢が高いほど明らかに増大するという知見を得、乳癌リスクとreproductive lifeの關係に、新局面を示された。数多くの賞を受けられたが、米国癌学会からの賞、米国公衆衛生学会からの賞、General MotorsのCancer Research Award (cancer prevention)等々がある。

マクメイン教授を偲び、心からご冥福を祈りたい。

## 2. 日本疫学会について

日本疫学会が、多くの方々の努力によって、順調に発展を遂げているのは、非常に嬉しいことである。発足時に考え望んでいたことは、多くの点ですでに達成された(?)とも言えよう。いま振り返ってみると、発足時には本当にやるべき事が多かった。会員数も少なく、会員増強が大きなテーマであった。学術総会を我が国の各地で開いた

が、その大きな理由は、各地での会員増強に役立てようと考えたからである。このニュースレターに関しては、ニュースレターを始めたいと、私が第1回の理事会(1992年6月6日)にお諮りした記録がある。学会の会員にとり、ニュースレターは重要であり、理事長が会員に連絡し、楽しく読め、そして多方面の役に立つ情報を提供する必要がある。

私が当時望んでいたのは、日本疫学会が臨床疫学、環境疫学、栄養疫学、生物統計などを含め、本当にMulti-disciplinaryなものになることであった。最近では臨床の方で、Evidence Based Medicineがすっかり定着したようである。これは実質的には、まさに臨床疫学であり、疫学という言葉に抵抗がある臨床の人たちが、EBMには飛びついたのかも知れない。疫学の範囲は広い。疫学の基本の一つは、Multi-disciplinaryであるべきだと思う。お互いの垣根を除いて、各分野の人が集まり協力する。疫学の分野は広く、日本疫学会がその方向で、今後一層発展することを期待したい。

## 3. がん予防と、食生活などとの関連に関する報告書、および勧告

2007年11月、“Food, Nutrition, Physical Activity, and the Prevention of Cancer: A Global Perspective”が発表された。これは世界中の論文を検討し、まとめたものであり、スポンサーはWCRF/AICR (World Cancer

Research Fund/American Institute of Cancer Research)であった。この報告書は、21名のパネルメンバー(編纂委員)が中心となり作成した。私は日本からただ一人の委員として参加した。1993年から5年の歳月と、年2回の国際会議と、確か10億円近い巨費を投じた膨大な作業であった。

この報告書は、1997年発表の報告書の改訂版である。同時に、相異点も種々ある。基本的に、reviewが疫学的なevidenceにもとづいており、その点は同一である。IARCなどと同様に、ヒトに関するデータが最優先された。相異点としては、客観性をより重視し、同一基準を設けてreviewに取り組んだこと、reviewに取り上げた論文は約7000に達したこと、メタアナリシスを可能な限り行ったこと、コーホート研究をより重視したこと、などである。その内容について詳しく述べる紙数はないが、そのSummary(12頁)は、若干部手元にあり、ご希望の方はご連絡ください。このSummaryは、日本語に訳し、頒布の予定にしている。本体の報告書の方は、約500頁の長さであり、添付のCDを含めば、数千頁になる。この方面に興味のある会員のご参考になれば幸いです。

(報告書の入手先, World Cancer Research Fund/American Institute for Cancer Research: 1759 R Street, NW, Washington, DC 20009, \$70.00)

# JEA(日本疫学会)会員各位へ

IEA, JEA名誉会員

青木 國雄、重松 逸造

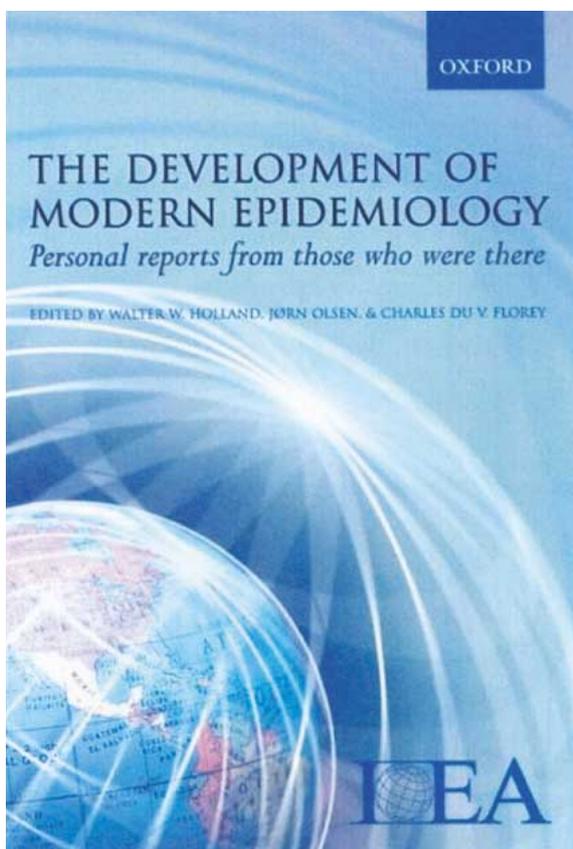
IEA〔国際疫学学会〕では、その創立50周年を記念して、昨2007年にWalter W Holland教授らの編集による単行書“The Development of Modern Epidemiology, Personal reports from those who were there”(Oxford Univ. Press)を出版した。本書にはIEAの創設者の一人John

Pemberton教授の史的回顧、今後の期待、Richard Doll卿の最後と思われる癌の疫学も掲載されている。内容は歴史と将来への道、主要疾患の疫学研究、公衆衛生、社会医学との関連、方法論、世界各地の疫学研究など、かつてない充実した内容で、これまでの疫学研究のほぼ全容が含まれている。

筆者らは本書の1章を分担したが、分担執筆者に対しIEA理事長のJorn Olsen教授から下記のような感謝状が送られてきた。この書面の中でOlsen理事長は、今後50年間における疫学のさらなる発展を若手研究者に期待すると述べている。これは筆者らも全く同感であり、会員各位に本書を是非一読いただけたらと、あえてニュースレターへの掲載をお願いした次第である。

平成20年春

(編集委員会注 この書籍の内容については次の記事の書評をご参照ください)



オックスフォード大学出版社より転載

23 September 2007

Dear Drs Aoki and Shigematsu

On behalf of the IEA Council, it gives me great pleasure to note with great appreciation and gratefulness your invaluable contribution to chapter 31, entitled Epidemiological methods: a view from north Asia/Japan of the landmark book: "The Development of Modern Epidemiology", issued on the occasion of the 50<sup>th</sup> Anniversary of IEA.

We all hope that such reflections on your life time experience will pave the way for young epidemiologists to further our beloved discipline for the next 50 years to come.

With best wishes for all your future endeavors

With best personal regards.

Yours sincerely,

(Sign)  
Jorn Olsen, MD, PhD  
IEA President

## 書評

自治医科大学公衆衛生学教室 中村 好一

Holland WW, Olsen J, Florey CDV, editors. The Development of Modern Epidemiology: Personal Reports from Those Who Were There. Oxford: Oxford University Press; 2007. (ISBN: 978-0-19-856954-1)

「賢者は歴史に学び、患者は経験に学ぶ」ドイツの鉄の宰相といわれた Otto von Bismarckの言葉とされている。私を含めて多くの疫学者は賢くなろうと試み、疫学の講義はスノウとコレラの話から始めるのが慣例である。

かつての国際疫学会 (International Epidemiological Association, IEA) の理事長であった青木國雄先生はわが国の疫学の歴史をおまとめになり、Journal of Epidemiologyに公表中である (Aoki K. Short History of Epidemiology for Noninfectious Diseases in Japan. Part 1: Selected Diseases and Related Episodes from

1880 through 1944. J Epidemiol 2007; 17: 1-18、Part 2: Epidemiology of Stroke and Hypertension up to 1970. J Epidemiol 2008; 18: 2-18、Part 3: Nutritional Dystrophia. J Epidemiol 2008; 18: 45-57)。なお、「英語は苦手」という方のために、青木先生のご厚意により、学会のサイトで元になった日本語論文を公開している。

Walter W. Holland先生も以前のIEAの理事長だが、Jorn Olsen先生 (現在のIEAの理事長)、およびCharles du V. Florey先生と共に現代疫学の歴史をまとめられたのが「Development of Modern Epidemiology: Personal

Reports from Those Who Were There」である。Holland先生は昨年1月の第17回日本疫学会総会の招待講演の中で本書の一部を、まだ出版前だったが、紹介されたので、ご記憶の方も多いと思う。当時、私はゲラをHolland先生から拝見したが、その内容には感銘した。これは「Personal Report」ではなく、最近50年間の世界の疫学の集大成である。そして今、この本が実際に入手可能となり、私の思いは確信へと変化した。

この本は5つのパートからなっている。

- (1) History and setting the scene
- (2) Specific disease areas of concern
- (3) Applications and role of epidemiology in related domains
- (4) Methodology
- (5) Regions and countries

それぞれのパートは4~14の章で構成されており、それぞれの章の担当はいずれも著名な疫学者ばかりである。たとえ

ばパート2の最初の章は「Development of the epidemiology of cancer」で、これは2005年7月に逝去されたSir Richard Doll先生が最期のお仕事として書かれたものである。パート5の第31章は青木國雄先生と重松逸造先生の共著で、「Epidemiological methods: a view from north Asia/Japan」である。各章では関連した文献が相当数示されており、さらにその分野について造詣を深めたい読者にとっては有益な情報となっている。個人的には、パート4でOlli S. Miettinen先生が執筆された「Theoretical developments」が興味深かった。なぜならば、若い頃、この先生の執筆された「Theoretical Epidemiology」(1985年)で苦労したからだ。もし疫学を志す若手が疫学理

論を学びたいのであれば、この章とここに書かれた文献すべてに目を通すと、良い勉強になるであろう。

もっとも興味深いのは、各章の冒頭に書かれている「Personal experience」である。多くの章の冒頭でそれぞれの著者が自らの経歴と疫学研究への関与を紹介している。おかげで、IEAの理事会で顔を合わせている何人かの理事の、今更尋ねるわけにはいかない経歴が、ここで判明し、私はそれだけでも感謝している。

もし疫学者が、特に若手疫学者が、賢者になろうと思えば、この本を通読することは基本的事項となる。たとえ1つの章だけ読んだとしても、自らの仕事が変わっていくだろう。

最後に、本書の編者3人の連名で書

かれた第1章の最後の部分を引用して、本書評を閉じることとする。「This book certainly illustrates the enormous contributions epidemiology has made in the past 50 or more years, both in methods and as well as applications to health improvements. The IEA can be proud to have fostered this activity and provides an excellent foundation for the future advancement of the discipline.」(中村 訳：過去50年間の疫学の方法論及び健康増進への応用における疫学の果たした巨大な貢献を実際に記述したのが本書である。このような活動を育成したことをIEAの誇りとし、この基本的活動の将来の発展に対する最良の基礎を提供する。)

## 学会報告

### 第18回日本疫学会学術総会を終えて

事務局長(順天堂大学医学部公衆衛生学教室) 山路 義生

1月25日(金)・26日(土)の2日間、第18回日本疫学会学術総会が東京都千代田区の学術センター・一ツ橋記念講堂をメイン会場に開催されました。前回は上回る、495名のご参加を頂き、無事学会を終えることができましたのは、学会員皆様のご協力によるものと教室員一同感謝申し上げます。

当日参加者の年齢層も幅広く、学会に対する情熱は日本でも有数のものと

実感いたしました。当学会が目指す、若手研究者育成が実りつつあり、今後一層活動を強化する必要性を感じました。一方、若手支援という意味では、昨年広島で始まった託児所の設置ができなかったことが心残りでありました。会場にお子様連れでお越しいただいた学会員にはご不便をおかけいたしました。是非、来年の金沢では復活させて頂きたいと希望します。また、報

道機関も延べ12名が取材に来られましたが、事前の対応、PRにももう少し積極性が必要であったと反省しております。

さて、今は良い経験をしたと感謝しておりますが、学術総会を準備する上で、悩みは尽きず、なぜ事務局長を引き受けてしまったのか、自分を恨むこともありました。現在、収支報告を作成しておりますが、経費をどこまで削減できるか、知恵を絞りに絞って学会に臨みました。何が自分たちに可能か、その限界を探り、一致協力することで何とか開催に辿り着きました。きっとこの経験の共有が、今後の教室の研究・教育・運営に活かされることと信じております。また、本学衛生学教室の稲葉裕教授以下教室員の皆様に多大なご支援を頂きました。これまでも研究・教育等連携して参りましたが、志が同じ教室が学内にあるということを一層心強く感じました。

最後になりましたが、今学会にご参加、ご協力頂いた全ての方に感謝し、本学会が社会貢献を目標に益々発展することを祈念して結びに代えさせていただきます。



山路義生事務局長(左)と丸井英二学会長(右)

## 第13回疫学の未来を語る若手の集いの報告

滋賀医科大学 村上 義孝

第13回疫学の未来を語る若手の集いが、平成20年1月24日(木)18時から20時に順天堂大学9号館で開催されましたのでご報告いたします。本年度の若手の会は、代表幹事である京都大学社会健康医学系健康情報学の宮木幸一先生のコーディネートのもと、厚生労働省医系技官の古元重和先生と元読売新聞論説委員の三木健二先生を迎えて開催されました。保健医療行政で実務に携わったり、マスコミで研究成果に触れたりする機会が多い、疫学研究に関連する方々が「疫学に何を期待しているか」について発表していただくことの期待も大きく、60人を越える参加者との有益なディスカッションを通じ、会が進められました。

初めに、宮木先生から今回の会の趣旨が説明された後、古元先生にご講演いただきました。「疫学と行政の接点 若手疫学者に期待すること」と題して、厚生労働省に在籍される医系技官という立場から、我々疫学研究者にかかる期待などについて話していただきました。若手研究者に期待することとして、1.常に科学的であること、2.即物的でなく視野広く深い研究を、3.社会に対し具体的な働きかけを、という3点を示されました。併せて、調査研究で得られた成果を政策反映するための行政担当部局とのコミュニケーション法について具体的にご説明されました。我々若手にとって現役の医系技官とお会いしお話を伺うことが少ないのですが、この機会にお互いが真摯で建設的な対話を求めていることが確認できまして、大変よかったですと思いました。

次に三木先生より「もどかしい疫学・頼もしい疫学」と題して、新聞記者時代の疫学の記事をめぐるエピソード、続いて、疫学研究を報道する際のもどかしさとその要因、そしてもどかしい状況からどう脱するかのご提案と

いう流れでご講演されました。

例えば、ゲノム研究における遺伝子・DNAを一般の人に説明する場合、「体の設計図である遺伝子、その本体であるDNA」と言えば理解してもらえるが、疫学の場合、このように一言で説明できるキャッチフレーズがない、クリアーカットな結論が出にくく個人に還元するデータが出現するのに長期間かかる、一般の人がわかるように翻訳するのが難しいなど、実際のもどかしさについて例をあげて分かりやすく説明して頂きました。

また、研究者の表現は受け身表現を多用するなど、正確で慎重だが一般人にはわかりにくいのに対し、記者の表現はずばりいい切る、くだけた表現でわかりやすいが、論文の結論の粹からはみ出し勇み足になることがあるなど、両者の文章表現の作法が根本的に異なることを対比的にご説明いただいたことは印象的でした。

ご講演の最後に、1.ジャーナリスト疫学研修セミナー、2.市民との対話シンポジウム、3.広報委員会の活動、4.環境や健康問題への視点重視などを通じ、もどかしい状況を脱する提案をされました。

お二人の先生方とも30分という短い時間のなか、具体例を交えながら大変



三木健二先生(左)と宮木幸一先生(右)

わかりやすいご発表をなさっていたのが印象的で、学術総会とはひと味違う若手の会らしい和やかな雰囲気の中で開催できたのは良かったと思います。世話人の先生方には受付やスライド設定、飲み物の買い出しなど、多方面にわたりお手伝いいただき感謝しております。また若手の会に引き続き行われた居酒屋での懇親会でも35人の出席者を数え、日本全国から集まった若手疫学者の出会いと情報交換の場として、よかったですと思います。金沢医科大学の先生方からは、来年度の金沢の日本疫学会の懇親会の立候補をいただき心強いかがりです。本年度の若手の会は新しい世話人になったばかりで不安な部分もありましたが、宮木先生の企画とリーダーシップのもと、有意義な会ができてよかったですと思います。特にマスコミ関係者との対話を目的とした「ジャーナリスト疫学研修セミナー」の立案につきましては、今後とも若手の会として検討していく価値があると思いました。来年は金沢で若手の会が開催されると思いますが、多くの疫学若手研究者の参加と討論を期待し、ペンを置きたいと思います。みなさんありがとうございました。



古元重和先生



三木健二先生

## 国際疫学会西太平洋地域学術総会に参加して

埼玉県立大学健康開発学科 若林 チヒロ

The joint Scientific Meeting of the AEA ( Australasian Epidemiological Association ) and the IEA ( International Epidemiological Association ) Western Pacific Regionが、2007年8月27日から29日に、オーストラリアの南端タスマニア島のホバート市にて開催されました。AEAは1987年に設立され、オーストラリアまたはニュージーランドで毎年学会を開催していますが、今年はIEAとの共催として行われたものです。

会場は港に面したホテル付属の国際会議場で、昼間は海景をみながら地元のお菓子をつまんでコーヒープレイク、夜はサーモンや帆立貝などシーフード三昧という食の豊かな学会でした。

タスマニア島は太古の自然が残る世界遺産でもあり、地元オーストラリアやニュージーランドを中心に多くの参加者が集まりました。日本からは15時間以上かかるにも関わらず総勢30名近い参加があり、オーストラリアとニュージーランド以外の国では最も多い参加者だったそうです。

学会初日の開会式では、IEA西太平洋地域担当理事の中村好一先生（自治医大）が挨拶をされ、そのあと日本疫学会理事長の児玉和紀先生（放射線影響研究所）の特別講演が行われました。中村好一先生は国際会議にふさわしく最初からジョークを飛ばしたスピーチで会場を盛り上げていらっしゃいました。児玉和紀先生の特別講演 “ Long term epidemiological study of atomic

bomb survivors in Hiroshima and Nagasaki history, achievements and public health implications ” は、第二次世界大戦で唯一の被爆国となった日本での被爆者の実態を明らかにした疫学研究についてでした。日本人ばなれた流暢な英語と豊富な写真や図を用いて講演され、参加された各国の研究者から大きな反響を呼んでいました。ヒロシマ研究に強い感銘を受けた参加者が多く、後日のパーティーなどでもしきりと話題になっていました。

今年、第18回国際疫学会が開かれるブラジルからは、Federal University of Bahia のBarreto教授からブラジルでの疫学研究や学会の活動の紹介がありました。毎年の学術総会の参加者は非常に大勢で、またブラジルでの疫学の盛況ぶりに認識を新たにしました。その他に、オーストラリアのUniversity of Queensland のLopez教授からは世界の健康問題について、米国のGeriatric Research Services and the Johns Hopkins School of Public Health のSorock先生からは高齢者について、ニュージーランドのMassey UniversityのPearce教授からはInternational Study of Asthma and Allergies in Childhood ( ISAAC ) についてなど、盛りだくさんの講演が行われました。

学会場での研究発表は、ポスター発表187題、オーラル発表37題のほかワークショップなどが行われました。私

もポスター発表をさせていただきましたが、ポスター会場は参加者が少なかったため、日本の先生方に発表の指導をしていただいたり、地元の参加者にゆっくり話してもらったりすることができ、英語の苦手な私にはよい経験になりました。

初日は港でチーズとワインのウェルカムドリンク、最終日前日にはタスマニア州迎賓館で歓迎パーティーが行われ、タスマニア州知事が参加者に混じって歓談していました。迎賓館を開放して州知事自らが学会参加者と交流し、ときには写真撮影に応じるなど、フランクでサービス精神が旺盛であり、日本にはない歓迎のし方だなと思いました。

タスマニアにはタスマニアデビルという、この島にのみ生息する有袋類の動物がいます。普段はおとなしくかわいいのですが、餌の争奪戦になるとたちまちデビルに変身し、バキバキと音を立てて骨まで噛み砕いてしまいます。10年ほど前からタスマニア全土に感染性の強いガンDevil Facial Tumor Diseaseが流行し、治療法もなく絶滅の危機に瀕しているため、オーストラリア政府はデビルの保護に力を入れているそうです。

今回のこの学会は、2010年1月に日本で開催する可能性も高いそうですので、皆さん参加をご予定ください。



ヒロシマの疫学研究を講演する児玉和紀先生



タスマニア州迎賓館での知事の挨拶



きょうだいで生肉の争奪戦をするタスマニアデビル

## 学会案内

### 第19回日本疫学会学術総会の予定

日 程：平成21年 1月23日(金)～24日(土)  
 場 所：石川県 金沢市文化ホール  
 (〒920-0864 金沢市高岡町15番1号)  
<http://www.bunka-h.gr.jp>  
 テーマ：疫学研究から健康施策へ  
 近年、疫学研究が数多く行われていますが、得られたエビデンスを机上の学とせず、健康施策へ生かしてこそ、価値のある疫学研究となる、との立

場から、特別講演やシンポジウムを企画しました。  
 学会長：金沢医科大学健康増進予防医学（公衆衛生学）  
 教授 中川 秀昭  
 事務局担当：西条 旨子  
 〒920-0293 石川県河北郡内灘町大学1-1  
 電話：076-218-8093, Fax：076-286-3728  
 E-mail:pubhealt@kanazawa-med.ac.jp

### 第18回国際疫学会のご案内

XVIII IEA World Congress of Epidemiology(EPI 2008)

日 程：2008年 9月20日(土)～24日(水)  
 (演題受付は既に終了しています。)  
 場 所：Porto Alegre (ブラジル)  
 テーマ：Epidemiology in the Construction of Health for  
 All: Tools for a Changing World  
 主なトピックス：

- ・疫学と他領域の学問とのコラボレーション
- ・疫学者と政策立案者との協力
- ・疫学とプライマリヘルスケア
- ・国際間、国内間の健康格差
- ・健康システムと政策研究における疫学
- ・臨床、公衆衛生ガイドラインの発展、推進、評価における疫学
- ・研究結果の臨床への橋渡し

- ・非感染症に対するヘルスプロモーション、疾病予防、サーベイランス
- ・疾病原因のニューパラダイム：分子から集団へなど

参加費：

	5月30日まで	8月31日まで	当日
国際疫学会会員等	US\$ 240.00	US\$ 280.00	US\$ 320.00
非会員	US\$ 300.00	US\$ 350.00	US\$ 400.00
非会員学生	US\$ 240.00	US\$ 280.00	US\$ 320.00
会員学生	US\$ 200.00	US\$ 240.00	US\$ 280.00

詳細に関しては疫学会ホームページのリンクからまたは直接<http://www.epi2008.com.br/ingles/index.php>にアクセスしてご確認ください。

### 第11回運動疫学研究会学術集会開催のご案内

日 程：2008年 9月 6日(土)  
 会 場：広島市まちづくり市民交流プラザ 6F  
 (広島市中区袋町 6番36号)  
 世話役：佐々木 英夫  
 (広島原爆対策協議会健康管理・増進センター)  
 テーマ：運動疫学の挑戦(仮題)  
 プログラムの概要：  
 シンポジウム「メタボリックシンドロームと運動疫学」、一般演題、懇親会

後 援：日本体力医学会、日本疫学会(予定)  
 詳細が決定次第、研究会ホームページ<http://jaee.umin.jp/>に掲載いたします。  
 問合せ先  
 第11回運動疫学研究会学術集会実行委員会  
 広島原爆対策協議会健康管理・増進センター 佐々木 英夫  
 〒730-0052 広島市中区千田町 3丁目8-6  
 TEL :082-243-2451 FAX :082-504-4851  
 E-mail:hsasaki@gentaikyo.or.jp

### 第9回運動疫学セミナー開催のご案内

日 程：2008年 9月 7日(日)、8日(月)、9日(火)  
 会 場：広島市国際青年会館  
 (広島市中区加古町 4番17号)  
 募集定員：30名(ベーシックコース・アドバンスコース)  
 主 催：運動疫学研究会  
 後 援：日本体力医学会、日本疫学会(予定)  
 詳細が決定次第、研究会ホームページ<http://jaee.umin.jp/>に掲載いたします。

問合せ先  
 第9回運動疫学セミナー実行委員会事務局  
 早稲田大学スポーツ科学学術院 劉 莉莉  
 〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15  
 TEL&FAX :04-2947-6779  
 E-mail:liulijing@aoni.waseda.jp

# 委 員 会 か ら の お 知 ら せ

## 将来構想検討委員会での検討により4つの臨時委員会が発足しました

3月29日(土)に開催された2008年度第2回理事会において承認され、4つの臨時委員会が正式に発足しました。それぞれの委員会と委員長は、以下の通りです(敬称略)。

統計利用促進委員会  
辻 一郎(東北大学)  
疫学研究支援委員会  
中村好一(自治医科大学)  
学術委員会  
中山健夫(京都大学)  
広報委員会  
岡山 明(結核予防会)

これらの臨時委員会は、昨年度の将来構想検討委員会(辻 一郎委員長)の活動から設立を提案されたものです。その平成19年度報告書の概要を紹介します。報告書全文は日本疫学会ホームページに掲載されています。

### 日本疫学会将来構想検討委員会 平成19年度報告書の概要

将来構想検討委員会は、わが国の疫学研究を飛躍的に発展させるための戦略を策定したうえで、その実現に向けた具体策を立案するとともに、その進捗を管理することを目的としています。2ヵ月に1回のペースで委員会を開催するとともに日常的にもメイリングリストを活用して、(1)疫学研究的飛躍的発展に向けた戦略の検討、(2)改正統計法に対する対応、(3)政府統

計の利活用に関する調査の3点を中心に検討が行われました。この報告書では、以下のことが提言されています。

#### (1) 若手研究者の確保とスキルアップを図ること

① 大学院教育や学会・関連団体のセミナーの充実を図る、② ポストを拡充するとともに流動性を高める、③ 日本疫学会「若手の会」活動をさらに充実させるとともに学会運営への関与の機会を拡げること。

#### (2) 疫学研究的調査環境を改善すること

レベルの高いデータができる限りオープンになるように、① 政府統計の利活用の促進(とくに人口動態死亡統計では日本版National Death Indexの創設)に向けた調査研究と提言を行う、② データ・アーカイブ(調査研究データを寄託して、学術目的での利活用をオープンにするための組織)の設立に向けた調査研究と提言を行う、③ これらを集中的に行うために、日本疫学会のなかに統計利用促進委員会を設置すること。

#### (3) 臨床分野との連携を強化すること

① 日本疫学会員と臨床研究との関わりについて調査を実施して、その課題と今後の方向性を検討する、② 疫学研究的を企画している臨床研究者などを支援する(臨床研究者などからの申請を受けて、支援を行う疫学者を紹介

する)ために、日本疫学会のなかに疫学研究支援委員会を設置すること。

#### (4) 社会貢献・社会へのアピールを強化すること

疫学研究的の成果を社会に還元するために、日本疫学会のなかに広報委員会を設置して、① 健康に関わる社会問題が発生した際には必要に応じて声明などを発することを通じて、世論を適切な方向に誘導するとともに日本疫学会と疫学研究に対する社会的認知を高める、② 学術総会時には優れた演題などについて外部への広報活動を行うこと。

#### (5) 学会機能を強化すること

① 日本疫学会事務局と学会誌JE編集委員会事務局の双方を統合して、その機能を恒常化する、② 評議員の役割・利点を明確化するとともに再任手続きを適切に行うことにより、評議員会の機能を強化する、③ 学会誌JEのさらなるレベルアップ(投稿・掲載論文数の倍増、Impact Factorのアップなど)に向けた取り組みを強化する、④ 日本疫学会のなかに学術委員会を設置して、学術総会に本部企画のプログラムを盛り込むなど、総会運営に積極的に関与すること。

以上の提言の実現と並行して、5年以内に学会員2000名規模となるような状況の実現を目指して、戦略的な取り組みの強化を呼びかけています。

## Journal of Epidemiology編集委員会からのお知らせ

日本疫学会学会誌 Journal of Epidemiology の編集委員会及び編集室について、今年から下記の新体制となりました。国際的疫学専門誌としての地位を確立するべく、編集委員一丸となって鋭意努力する所存です。みなさまからの質の高い論文の投稿をお待ちしています。

### 編集委員長

祖父江友孝(国立がんセンター)

### 副編集委員長

辻 一郎(東北大学大学院)

### 顧問編集委員

中村 好一(自治医科大学)

橋本 修二(藤田保健衛生大学)

### 編集委員

石川 鎮清(自治医科大学)

井手 玲子(産業医科大学)

井上真奈美(国立がんセンター)

大久保孝義(東北大学大学院)

岡村 智教(国立循環器病センター)

黒沢 洋一(鳥取大学医学部)

佐藤 俊哉(京都大学大学院)

新開 省二(東京都老人総合研究所)

関根 道和(富山大学大学院)

曾根 智史(国立保健医療科学院)

谷原 真一(福岡大学医学部)

永田 知里(岐阜大学大学院)

西 信雄(財放射線影響研究所)

林 朝茂(大阪市立大学大学院)

三浦 克之(滋賀医科大学)

溝上 哲也(国立国際医療センター)

安田 誠史(高知大学医学部)

### 編集コーディネーター

橋本 勝美(国立がんセンター)

### Journal of Epidemiology編集室

〒104-0045

東京都中央区築地5-1-1

国立がんセンター がん対策情報セン

ターがん情報・統計部気付

電話: 03-3542-2511(内線3423)

Fax: 03-3546-0630

E-mail: edit-je@cied2.res.ncc.go.jp

## 第18回国際疫学会の旅費補助対象者が決定しました

国際交流委員会委員長 中村 好一

2008年3月29日(土)に開催された理事会において、本年9月にブラジルで開催される第18回国際疫学会への旅費補助の対象者が、以下の方々に決定しました(順不同、敬称略)

横川 博英(福島県立医科大学)

村上 義孝(滋賀医科大学)

鈴木 孝太(山梨大学大学院)

田栗 正隆(東京大学大学院)

池田 若葉(順天堂大学医学部)

大庭 志野(岐阜大学大学院)

Dambadarjaa Davaalkham

(University of Mongolia)

支給額はひとり10万円です。なお、

本年度までの日本疫学会の会費を全納していること、国際疫学会で演題が採択されることが条件で、対象者本人が学会で演者として発表しない場合(共同演者の発表など)には、補助金を返還することとなっています。多数のご応募、ありがとうございました。

## 事務局だより

### (1) 日本疫学会会員数

(2008年2月21日現在)

名誉会員 27名 評議員 215名

普通会員 1187名

入会手続き等のお問い合わせは、下記事務局までお願いします。

### (2) 会費納入と名簿作成のお願い

2008年度の会費納入に関するご案内と名簿作成についてのご案内を、2月20日に会員の皆様へ発送いたしました。

会費納入につきましては、速やかにお支払い頂きますようお願い申し上げます。なお、年会費を2重にお支払いいただいた場合、現金書留にてご返金いたします。また、その際に発生する郵便料は差し引かせていただきます。事務局では翌年度に会費をお返しするというを行っておりませんので、予めご了承ください。

また、今年度は会員名簿を作成いたします。名簿作成へのご協力をお願いをご確認の上、同封しております返信

用封筒にて6月30日までに下記事務局までご返送くださいますようお願い申し上げます。

なお、ご案内がお手元に届いていない方がおられましたら、下記事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

### (3) 日本疫学会奨励賞募集要項

日本疫学会奨励賞に関する細則にもとづき、以下を満たす受賞者の推薦をお待ちしています(詳細は細則をご覧ください)。

・本会会員のうち、優れた疫学的研究を行い、その成果を日本疫学会、Journal of Epidemiologyおよびその他の疫学関連学会や専門雑誌に発表し、なお将来の研究の発展を期待しうる者(原則として個人)

・受賞者は継続3年以上の会員歴を持つ本学会会員に限られ、受賞の暦年度の募集締切り日において満45歳未満の者  
なお、推薦書の提出期間は5月1日

から6月30日で、原則として評議員からご推薦いただくこととなっております。日本疫学会会員名簿・日本疫学会諸規則集(2005年11月発行)にあります推薦書様式をもとに、候補者をご推薦くださいますようお願い申し上げます。

### (4) 日本疫学会通信

事務局から会員の皆様へEメールによる日本疫学会通信を発行しております。この送信がご不要な場合やメールアドレスの変更、訂正などが必要な場合、事務局(jea@rerf.or.jp)までご連絡ください。

#### 【日本疫学会事務局】

(財)放射線影響研究所 疫学部 気付

〒732-0815

広島市南区比治山公園5番2号

TEL:082-568-8531・FAX:082-568-8532

E-mail:jea@rerf.or.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jea/index.html>

事務局長:西 信雄

事務職員:岩見 佳代・高橋 奈水子

## 編集後記

ニュースレター31号を無事に発行することができ、まずはご執筆にご協力いただきました諸先生方に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。今回も盛りだくさんの内容となりました。学会員の方々に有意義な情報となれば幸いです。

編集作業については、私自身不慣れなことも多く、諸先輩からのアドバイスやメールのやりとりから学んでいる状況です。とくにメールでのやりとりが多く、着信履

歴などから深夜あるいは早朝のメールを見つけますと、編集への熱意や責任をしみじみと感じさせられます。メールの内容から疫学領域の新たな一面を垣間みることもあり、私にとっては新鮮そのものです。反面、人に情報を伝えることの重要性や困難さを今さらながら感じることもあります。次号の発行にも貢献できるよう精進して参ります。この経験を大切にして、自分の研究活動にもますます磨きをかけたいと思っております。

(北島)